

参考様式 1 (開催概要)

平成 27 年度第 1 回足立区地域包括ケアシステム推進会議  
認知症ケア推進部会 会議録

会 議 名	平成 27 年度第 1 回足立区地域包括ケアシステム推進会議 認知症ケア推進部会		
開 催 年 月 日	平成 27 年 11 月 13 日		
開 催 場 所	生涯学習センター		
開 催 時 間	14 時開会 ~ 15 時 50 分閉会		
出 欠 状 況	委員現在数 17 名 出席委員数 14 名 欠席委員数 3 名		
出 席 者	永田 久美子	久松 正美	小川 勉
	浅野 麻由美	武田 紘之	伊藤 俊浩
	縄田 陽子	西島 久雄	内藤 章
	茂出木 直美	足立 義夫	橋本 弘
	井元 浩平	大高 秀明	
事 務 局	事務局：高齢サービス課 絆づくり担当課、福祉管理課、介護保険課、社会福祉協議会		
会 議 次 第	別紙のとおり		
会議に付した議題	<p>【報告・検討事項】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 認知症に関する先進自治体の活動事例について</li> <li>2 足立区の高齢福祉分野、認知症に関する基礎的な数字</li> <li>3 認知症対策事業全体イメージ ~ もし認知症になっても過ごし続けられるまち「あだち」を実現するために ~ について</li> <li>4 認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて</li> </ol>		

依田高齢サービス課長 皆様、こんにちは。定刻を過ぎてしまいましたけれども、ただいまから第1回「足立区地域包括ケアシステム推進会議認知症ケア推進部会」を開催させていただきます。

本日は御多忙の中、御参加いただきまして、ありがとうございます。

私は本日の司会を務めさせていただきます、高齢サービス課長の依田でございます。どうぞよろしくお願いたします。

まず、資料の確認をさせていただきたいと思います。事前にお送りした資料ではなく、今日席上に配付させていただきました資料で御確認をいただければと思います。

まずは、本日の次第、委員名簿、席次表。

資料1といたしまして、永田先生に御用意いただきました先進自治体の活動事例。

資料2といたしまして、高齢介護分野における認知症等々の足立区の基礎的な状況の数字。

資料3といたしまして、A3横の大きいイメージ図ということで、御用意をさせていただいております。

もし、なければ、途中でも結構ですので、挙手をしていただければと思っております。よろしくお願いたします。

この会議は、足立区地域包括ケアシステム推進会議認知症ケア推進部会設置要綱第6条第2項により、過半数の委員の出席により成立することとなっております。現在、過半数に達しておりますので、部会は成立しております。

皆様から活発な御意見、御質問をいただくためにも、迅速な会議進行に御協力いただきますよう、よろしくお願申し上げます。

なお、この会議の委員名や会議録などは区民の方へ公開することとなっております。記録の関係上、御発言の前にお名前をお願いたします。

続きまして、まず、部会長の就任についてでございますが、足立区地域包括ケアシステム推進会議条例施行規則第4条により、部会を設置する場合は、推進会議の会長が推進会議の委員のうちから部会の委員及び部会長を指名することとなっております。今回、諏訪会長の指名により、永田委員に部会長に就任していただくこととなっております。

また、副部会長につきましては、部会長の指名により、副部会長を置くことができることとなっております。今日、お見えになっていませんけれども、諏訪委員が副部会長として就任していただくこととなっております。よろしくお願いたします。

それでは、永田部会長、就任の御挨拶をお願いたします。

永田部会長 皆さん、今日はどうもありがとうございます。

部会長ということで、本当に今回のこの足立区の認知症ケア推進部会、非常に時期的にも重要な時期で、この部会でどういう意見、検討がまとまるかで今後の足立区全体の認知症の方たちの暮らしもそうですけれども、後で申し上げますけれども、やはり認知症というのは地域のいろいろな課題の縮図であって、この認知症の人への支援がきちんと動き出すと、ほかのさまざまな暮らしにくい課題を抱えている方たちにとっても暮らしやすい町になっていくかと思っておりますので、ぜひそうした広い視野で、この部会が実りある討議ができればと思っております。

地元の間人ではないので、本当にわからないことも多いと思っておりますけれども、むしろ委員の皆さんたち一人一人のもともとの御経歴とかお力をうまく出していただくためのつなぎ手役として、コー

ディネーター的な役割として部会長を引き受けさせていただいて、足立区で本当にさまざまな立場の人が総力を結集して、認知症になっても住みやすい町になっていく、そうしたいい動きができるために力を尽くしたと思いますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

依田高齢サービス課長 ありがとうございます。

本日、部会長に就任していただきました永田先生は、全国各地の自治体の認知症施策にかかわっていらっしやいます。今日、式次第にございますように、まず初めに永田先生のほうから各地の活動事例について御講演をいただきたいと思っております。

早速ではございますが、永田部会長、よろしくお願いいいたします。

永田部会長 これから時間を少しだけいただきまして、委員の皆様方の討論の、これからの話し合いのたたき台として、ぜひほかの地域の例も情報提供させていただきたいと思っております。

今日、この時間にこうしたお話をさせていただけるということで、タイトルを何にしようかなというのを非常に悩んだのですけれども、今、一番全国的に大きく変化が来ているのは、認知症になってからの問題だけを見てしまうと非常に行き詰まってしまう。問題もきちんと直視しながらも、認知症になってからの持っている可能性ですとか、認知症になってから、あるいは町そのものの健全な部分をどれだけ強めていって、認知症になった人が生き生きと暮らし続ける。この生き生きと暮らし続けるというのは決してきれいごとではなくて、認知症を持ちながらも、こういうふうに生きていけるという新しい足立区のこれからの認知症のイメージ、認知症になってからの生き方をしっかりと示す。それを単にきれいごとではなくて、一人でも多くの方がそういう暮らし方ができることを実現するということを、これは一人では支え切れない。今日の委員の皆様方の医療や介護、民生委員の方や自治会や商店の関係の方、シルバー人材の方、本当にさまざまな人たちの力を結集することで、こうした方向性をどう実現できるかということの呼び水として、お話をさせていただきます。

私がこうしてお話しできるのは、実は決してきれいごとの世界ではなくて、全国の市町村でこうした生き生きと暮らし続けるということの実現に向けて着実に一步一步進んできている市町村がありますので、今日はそのこともお伝えさせていただきます。

お手元に同じものがございますけれども、正面のスライドを、今日は時間が限られていますので、少しピッチを上げて説明させていただきますので、スライドをごらんください。

足立区でも既に2万人を超えている認知症の方々がおられるし、この10年、20年とまたかなりのスピードで認知症の方が増えていかれる。従来の認知症の人の問題というだけではなくて、むしろ認知症の人の状態というのは、家族の姿や地域の姿を非常に反映して、ニーズも非常に多様化している。従来なかったような問題も起きてきている。積み残しの課題が山積している。

こうした状況に、国のほうも対応していくために、また、足立区もそうだと思いますけれども、多様な課題の解消に向けて、施策や事業が年々増え続けてきている。増え続けるのはいいのだけれども、コストも限られている人手も時間も限られている。ただただ事業を増やしたり、事業を続けていくだけでは限界に来ている。何よりも最前線で取り組んでいる人たちの疲弊が非常に著しいというのが多分足立区でも、頑張っている最前線の人ほど、これ以上どれだけ頑張れというんだというぐらい、すごい努力をされて、疲れ切っておられるというのが現状ではないかと思っております。

こうした現状の中でも、何とか実質的な成果を上げていかなければだめだ。今、何をしたらいいのだろうか。それぞれの立場で役割はあるとは思いますが、こうした部会で話をするべきことは、区として何に注力することが今、必要なのか。やるべきこと山ほどあるけれども、全部をあれこれやってもちっとも成果が出てこない。何に注力するのかという点をこうした部会の中で皆さんの意見をもとに方針を決めながら、ここでの方針をさまざまな人にも伝えながら、まず、足立区ではこういう点をしっかりと固めて、息長く足立区としての取り組みを発展させていこうという、こういう流れが今、とても必要なのではないかと思います。

皆さん御存じのように、認知症というのは発症の前にグレーゾーンの、足立区でもMCIの方、軽度認知症の方がこれも2万人くらいおられるとお聞きしていますが、この早い段階から症状があらわれ、徐々に症状が強まったり、あと、身体面の障害も加わりながら亡くなっていかれる。非常に長い経過をたどる、非常にごく初期から本人も家族も暮らしの中で危機に直面していく。この5人家族が共振れしながら長い経過を歩いていくわけですが、本当にこの長い経過全体を支える視点を持たないと、どこかのサービスで一部だけを支えるということでは、区民の安心は得られない。この長い経過に沿って、どういう支援の体制をつくっていくことができるかということですね。

年々、こうした認知症サポートの講座ですとか、これはごちゃごちゃと書いてあるのは、最近の認知症施策を一つ一つ挙げたものですが、本当に初期のころからの取り組み、初期集中支援の取り組みやもの忘れの体制づくり、あと、それらを受けながら、介護事業者等のケアマネジメントや、居宅のサービス、地域密着の大切なサービスや施設サービス、医療・介護も含めて、またさまざまな地域支援の事業も今、増えてきている。つなぎ役として、認知症支援推進員という重要な役割も足立区では配置されたり、サポート医の先生もおられる。

また、認知症に限らず、今、地域づくりのための生活支援コーディネーターというものの配置も国のほうでは進められていたり、非常にさまざまなものが増えてきているのだけれども、認知症の人が、また、家族がこの経過を本当の意味で危機を回避しながら減らせているか。

この右側にとほとあるのは、私は各地の市町村の職員さんたちとお話をしていると、いろんな事業が増えたはいいのだけれども、余りにもいろいろなものがあって、全体を把握し切れない。増えたことで逆に関係する人たちのネットワークとか、情報交換とか、知らない人たちでいっぱいのことを動かさなければだめになっていて、事業が増えたことでの混乱も逆に増えている。まさにとほとという状況が今、現実の施策ではないかと思います。

参考までにですが、皆様も御存じだと思いますけれども、国の施策、これは御紹介するのは国の施策がこうだから、国が掲げているものをしなければならぬということではなくて、今、かなり国が本腰を入れて認知症の新しい取り組みを始めようとしているので、むしろ国の施策をうまく足立区に生かしながら、足立区の取り組みを本格化させていっていただきたいという意味で、この1枚を出させていただいています。

一番注目したいのは、この認知症施策推進総合戦略、新オレンジプランというものですが、この副タイトル、です。認知症の対策ですけれども、もはや認知症の高齢者だけを対象にしていたので

は間に合わない。ここに「認知症高齢者等」とありますように、認知症になる前のまだまだ元気な高齢者や、中年や若者、場合によっては小中学生や保育園の子供とか、本当にちびっ子から元気な大人、お年寄りまで全ての人を含めた、視野に入れた取り組みが必要であるということ。あと、複雑な取り組みではなくて「やさしい地域づくり」が必要。当事者にもわかりやすく、誰にでもわかりやすく、本当に人としてやさしい取り組みになっているか。お医者さんも介護職も、本人・家族から見たら本当にやさしいかわりができたり、本人・家族が本当にやさしい人に出会えたな、これならこの医療介護を利用していきたい。これなら地元の人たちに早く困っているんだと相談しやすいという、「やさしい地域づくり」を目指そうという点です。

一番上の四角の中に、もう一つ大事なことが記されています。認知症の人を単に支えられる側と考えるのではないという、認知症の人は従来、医療や介護の対象者として支えられるという位置づけだけで捉えられてきましたけれども、今、現状、よく本人・家族の、特に御本人たちの様子を見ると、決して支えられる一方ではなくて、持っている力を生かしていただくと、いろいろな活躍がまだまだできる方が多い。シルバー人材センターで一緒に働き続けたりとか、あるいは、地域の若者や子供たち、働き盛りの忙しい人たちをバックアップするような仕事ですとか、あるいは人手が足りなくなっている谷間産業をカバーするような、稼ぎながら、収入を得ながら働く認知症の人も最近全国では増えてきている。従来の支援されるというよりも、むしろ働き手として、地域の支え手として認知症の人を大事にし、認知症とともによりよく生きていく。認知症だからもうおしまいという暗い発想ではなくて、認知症があっても、これからの残された時間をよりよく、それも地域の一員として生きていこうという発想自体をしっかりと、医療も介護も住民の人たちも共有しながら、新しいまちづくりを進めていこうという方針が立てられています。

いろいろ啓発ですとかと、適切な医療・介護の連携、介護者の支援等、一番下に7つの柱がありますけれども、非常に重要なのは、新オレンジプランで新しく加えられたのが7つ目の柱、徹底的に本人と家族の視点を重視しよう。本人・家族のためと言いつつ、本人・家族から見て本当に使いやすいサービスなのか。本人・家族から見て本当に支えてもらえる地域の中。この視点を重視をきれいごとにしなくて、 から 、啓発は本人・家族から見たらやさしい啓発になっているのか。医療・介護等は本人・家族から見たらどうなのか。これからの取り組みの全ての根幹は本人・家族から見てどうかということを大事にしていこうという、こんな方針が立てられているところです。

その次のスライドを見ていただきますと、今、何を目指していくか、これはあくまでも国の方針ではありますけれども、非常に重要な点が盛り込まれていると思います。

あともう一点、一番下のところにありますように、こうした目指す姿を特に効率的に、じっくりと焦らずにですけれども、限られた時間で、必要な人にしっかりと支援を届けていくために、効率性が大事だ、急がば回れで、何が必要か、本人の声をきちんと聞くこと。足立区とか地域をとことん大事にする。今までも何十年も足立区でいろいろな認知症の人を支える医療や介護、民生委員さんの努力、いろんな人たちがたくさんのことやってきているわけで、今、あるものをとことんもう一度掘り起こして大事にしていこう。そして、分野を超えてどれだけつながりながら一緒に力を合わせていけるのか、何をしたらいいかは関係者からしっかりと意見を聞きながら、まさにその一環できょうは皆様方お一人お一人に意見をぜひお出しただければと思います。

こうした方針をもとにしながら、ぜひ、今、お伝えしたように、断片的な取り組みをやったり、数をふやしただけではもはや解決しない。認知症とともに暮らしている本人や家族から、自分の地域、足立区とか、今、ある支援を本人の側から見るとどう見えているのだろうか。本人の側から見たらどういったものが必要なのか。あと、ぜひ取り組みも本人と一緒に作る。本人抜きに何事も進めないというのが今の認知症の取り組みの世界の非常に重要な言葉になってきています。本人を抜きにしない。これは話し合いのときもそうだし、実際の活動や支援でも、本人と一緒にという点です。

次のはちょっとおまけなのですけれども、これは今、平成27年度が非常に大事な時期だと、今日、冒頭でお伝えしたことの背景を少し説明した1枚となります。今年度から第6期の介護事業計画等が進んでいると思います。この27年から、これから3年間、もう2年半ぐらいですけれども、29年度末まではどちらかというと、余り先を焦り過ぎずに、30年度以降、あるいは本格的にもっともっと認知症の人たちも増えてくるこれから向けた基盤をしっかりと固める。ただただ数を増やしたり、形だけをつくらないで、足立区として何をやるべきかということの方針をきちんと固めたり、既にあるものをしっかりとつなぎ合わせて、基盤もつくって、これからに向けて動きやすい、みんなの力を固めながら、いろいろな問題や事業が来ても、このネットワーク、つながりの基盤があれば何でも動けるぞというような、動きやすい基盤をつくるというのがこの3年間の重要な位置づけではないかと思っています。またそのスタートとして27年、こういう部会が置かれたというのは足立区として非常に将来を見据えた取り組みではないかと考えています。

全国の先進地域の御紹介をさせていただきますけれども、先進地域というのが必ずしもお金も人手も豊富な地域では決してありません。全国の市町村を調査させていただくと、どちらかというと、高齢化率が高かったり、生活保護の世帯率が高かったり、税収が非常に低くてお金もないという、非常に苦しい地域だからこそ、認知症のことを後回しにはできない。むしろ、認知症のことをきっかけにすることで、若者、子供たちも暮らしやすい、あるいは自殺の人を減らそうとか、認知症のことを切り口に、非常に多機能の取り組みに展開していく。お金がないことがむしろ知恵が働くというような動きが出てきております。

そうした自治体の共通点として、今日は時間が限られておりますので、大きく2点出させていただきます。先ほどから言っている本人・家族の視点に立って事業・取り組みを見直すという点です。実は、国の新オレンジプランの骨格になったのは、全国の市町村、先進的な自治体がコストを余りかけずに非常に成果を上げているという、先ほどの本人・家族の視点の重視というのは、まだ10年間ぐらいの先進自治体の取り組みの一番エッセンスを入れたものになっています。この最初の「長年の事業・取組みの棚卸し」というのは、さんざんいろいろな事業や取り組みがあるので、それをもう一度棚卸しして、本当に必要なものは何で、何を大事にしていくべきかをしっかりと整理してみようということ。いずれにしても、認知症施策、今、行政のほうでも最大のテーマになっている地域包括ケアシステム、この部会の親委員会も地域包括ケアシステムの推進が中心テーマなわけですけれども、認知症施策をやるということは、地域包括ケアシステムやまちづくりとまさに

表裏一体であるし、認知症のことをやると根幹ができて、そういう点を大事にしていきたいというところ。

あと、2点目として、パーツパーツの事業をやるというよりも、足立区で認知症になった人がどんな経過をたどっていくのか。早期のほうはどうか。進んでいくとどうか。終末期に近くなるとどうなのだろうか。本人が生きる経過に沿って、それぞれの時期の本人と家族が必要としているものに沿って、今、ある地元の資源や事業をもう一度組み立て直す。ひたすらお互いがつながる。お互いがつなげていく。こういう点が重要だと言われています。

そうしたベースとして、2番目として本人・家族の声を素朴に聞こう。本当に必要なことを当事者から聞いているのかということですね。周りから見た、こんな支援が必要だというものはいっぱい積み上げられているけれども、今、足立区で暮らしている当事者、本人・家族が本当は何に困って、何があればもっと元気になったり、何があれば本当は本人・家族ももっと力を出せるのかという、本当に必要なことを当事者から十分には聞けていない面もあるのではないかと思います。本人・家族と一緒に声を聴きながら、一緒に支援や地域を一緒につくっていきましょう点です。

これから実際を見ていただきますけれども、これは一つ、石川県の加賀市です。石川県加賀市の特徴、昨年1年かけて、事業をすることを焦らずに、徹底的に今の地元の実情がどうか。あと、行政だけで号令をかけるというよりも、地元の住民やいろいろな方たち、介護や医療の関係者とともに、どういう地域にしていったらいいのか、徹底討論をしよう。住みなれた地域で、認知症でも自分らしく暮らせるということを、きれいごとではなくて実現に近づけていくためのアイデアを出し合おう。そういう取り組みを去年1年かけてしています。

ちょっとこれも、時間がないのですけれども、まさに今日の会議のような検討部会、検討委員会で専門家が検討すると同時に、住民さんたちや介護や医療の最前線の職員も交えての徹底した話し合いを積み上げています。同時に、認知症は医療や介護だけではなくて、商店街だとか、働くだとか、あるいは交通の安全だとか、非常に他分野にまたがるので、役所を横断してのワーキングも立ち上げられている。この中で、何をみんなですていったらいいかなということですね。話し合った経緯があります。

その中で、こんなふうに余り肩ひじ張らずにみんなで実情と本音を話そうと。何が必要なのだろうか。何を大事にすると、これからは自分たちも年をとって行く中で、安心して認知症になっても暮らせる町になるのか。本当にいろんな人たちが、自分のアイデアをどんどん出し合った話し合いを積み上げていった状況です。

そんな中で出てきたのが、施設入所の人が多いと言われるけれども、本当に施設入所をしたいと思っているのだろうか。もちろん、施設の大事さと同時に、もう一方、ニーズを掘り下げてみよう。いろいろ介護サービスの保険料も上がっているし、介護サービスの利用者は増えているけれども、単にデイサービスとか訪問介護とか、サービスを組み合わせればいいのか。何でサービスが必要と言っているのか。それをもっと当事者なども含めて話をしたら、つながりが欲しいと、サービスを受けるとはなくて、自分のことは自分でもって決めたいとか、世話になりたくないとか、いろ

いろいろな意見が出てきています。

こういうものをもとにしながら、加賀市としては徹底的に自分が自分らしいあり続けることを大事にしよう、それをお互い認め合おう。住民主体だ。自分たちの町は自分たちでつくる。この自分たちはという中の、住民さんと専門職をばらばらにしないで、住民行政の人も介護や医療の事業者も、自分たちの町としてお互いが支え合えるという地域づくりを目指そうということ。

1つの市といっても広いので、圏域単位に非常に特徴も違う。自然体の方針を、実際に動くのは、あるいは自治体に作戦を練るのは圏域単位にしていこう。圏域単位で話し合いをしながら、それぞれの地域ごとに自分たち、住民さんと専門職の混合チームをつくりながら、話し合いが重ねられていっています。

これで第6期の事業計画として非常にわかりやすい、市民や誰にでもわかるものとして、基本目標としては、認知症の人も含めて、本人がしたいことを支援する。周りが何かさせるというよりも、一人一人のささやかな願いを本当になんかしてあげる。これは実は認知症の方も、こういうことをしたいという意欲を崩さないで、働きたいとか、本人がしたいことを支えると非常に状態像が落ち着くという地元の事例をもとにしながら、したいことを支える仕組みづくりをしよう。そして、地域で安心して生活し続ける体制をつくろう。一番下にところ、支え合いの体制をつくろうという、これが主としての骨格になって取り組みが進んでいます。

先ほど、地域別ということをお伝えしましたがけれども、それぞれ本人主体、住民主体を車の両輪にしながら、それぞれの圏域、これは足立区でいうと包括支援センター単位でそれぞれの地域で本人主体、住民主体の具体的な姿を考えていこう、そして、動き出していこうという、そんな車の両輪になってという方向です。

今日、時間がないのですけれども、本当にどうしたらこれが現実になるかの戦略会議とかも重ねながら、本人が望む暮らしを初期から最後までやっていこう、地域支援推進員の方たちをコーディネーターとして、初期からお医者さんと一緒になりながら、本人・家族が安心して長い経過を歩める相談役、パートナーとなっていこうという、こんな絵もつくられています。

今日は本当に時間がないので、もう終わりにしていきますけれども、このように一人一人の「軒下マップ」、一人一人が実は自分の大事なつながりの自己資源を持っている。何十年も暮らしてきて、買い物に行ったり、美容院や床屋さんに行ったり、楽しみがあったり、このつながりを切らないように、これを基盤にしながら、これに医療や介護もそっと入らせてもらって、本人・家族が安心して暮らせるよう、専門職は地域の人たちのバックアップをしっかりとしながら、専門的な人と地域の人と一緒に本人を支えていくという動きです。

そして、ばらばらに動くというよりも、第1層として、本人・家族・近所の人たちがしっかり支えつつ、そこをもっと縁のある、地域とつながりのある組織や人たちで支えて、それをまたさらに



しっかりと医療や介護が支えていくという、こんな3層構造で仕組みづくりを進めている状況です。

次に、町田市。皆様お聞きになっているかもしれませんが、町田市はケアパスづくりとかさまざまな事業で話題にはなっていますが、町田市がすごく大事にしているのは、まさに本人・家族の視点に徹底的に立とうという事業を、本人・家族の視点で貫こうという取り組みです。本人・家族がどう思い、どう行動するのか。これに沿って取り組みを組み立て直そうということで、相談も一律ではなくて、本人・家族の目から見ると、本当に相談したいという人もいます。その下のパターン2として、自分から医療機関とか相談機関に相談しにくい、認知症の疑いがあっても相談できない人たちもいます。本人・家族の目線に立って流れを変えていこう。自分から相談したい人には相談の場がどこかとか、どういうところにつながるのか選べるように、あるものをわかりやすく示していこう。相談しない人たちをどう掘り起こすのか、実態把握の中から捉えられた人を調査で終わらせずに、捉えた人を相談とか、初期の支援につなげていこうという、初期の支援チームとか、相談機関も大事だけれども、待っているというよりも、本人たちの目線に立って、必要な人がつながるジョイントをつくらうという動きです。

そして、現場をよく知る地域包括支援センターの職員とか、関係者が徹底的に討論して、初期のころ、中盤、最後の終末期のころ、本人がどう暮らしていけるのかという、「まちだ・ほほえみ街道」などという名前をつけていますけれども、ケアパスなどといっても、難しい言葉はわからないので、本人が初期のころ、どういう状態だとこの町にはどんな支援がありますよ、こんなものを使いますよというのを、本当に小学生でもわかるような、お孫さんが、お父さんやおじいちゃん、おばあちゃんにもお伝えできるようなわかりやすい資源のマップをつくって、これは非常に住民さんたちにも好評で、これを通じて相談とか、つながる人が増えてきているような状況です。

あくまでも本人が主人公なのだと、認知症の人がどうなのか。本人が困ったら、こんなところが使えるよ。本人が、こういうものが必要としたら、こんな場所があるよというのが本人視点で明記されて、市の全部の相談窓口の職員がこういうものを生かして、仕掛けとして本人が主人公になるので、相談を担当する人たちが自然と、本人さんはこうですねという、本人視点で相談関係者や主任ケアマネさんやケアマネさんが一気に、認知症については本人視点で考えて、その視点で支えていくのだというのが広がっていったらいいです。民生委員さんの方たちにも一緒にこういうもので、本人の目線に立って考えようという動きが急速に広まっている仕掛けとなった道具といえますか、リーフレットです。

次の事例、静岡県の富士宮ですね。これは一つ参考例として、本人と家族の声を聞こうというのを先ほどお伝えしていますけれども、「始まりは、『一人』から」。皆さん、御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、今、静岡県の富士宮は全国の認知症の地域づくりのトップランナーとして本当に毎週のようにどこかのマスコミに新聞やテレビ報道されているところですが、今でこそトップランナーと言われているが、内実、集中的に取り組み始めたのはこの三、四年です。何か動き出したかといったら、一人の人のありのままの声を聞こう、何に困り、何が必要かということ

行政の関係者もケアマネもみんな、一人の声を本当に素朴に聞いて、聞いて終わらせずに動き出す。本人と家族が必要としていることを、まずはかなえるアクションをしよう。それを一部でとどめず、多面的に生かそうという、働きたいという方には、地元で働く活動の場をつくらう。本人の声を伝える機会をつくらう。お医者さんの集まり、介護職の集まり、若いお母さんやPTAの集まりでどんどん本人さんが認知症になるとどんなことが起きて、どんな支援が欲しいか。家族が何に困り、家族もどう支援してほしいか。いろいろなところで当事者が語る機会をつくった。

あと、認知症がどうしても暗く深刻なこととして受けとめられがちだけれども、認知症の人たちは、確かに切実な問題が多いけれども、切実な面だけに光を当てていると、どんどん周りから問題と見られたり、問題だけを見ていると、本人・家族も物すごく萎縮していってしまう。確かに問題もあるけれども、まだまだ元気な面もある。楽しみたいとか、遊びたいとか、周りの人と一緒に何かしたいという楽しみを入り口にしていくと、つながりが物すごく広がっていく。深刻な問題を入り口にすると、実は限られた人しかつながってくれない。深刻な面を強調しすぎると、みんな大変でいやだねという、本人・家族を排除するほうに力が働いてしまう。同じ一人の人でも楽しみをきっかけにすると、一緒に体を動かして汗を流そうとか、一緒に喫茶店でおいしいコーヒーを飲もうとか、散歩に行こうとか、楽しみを通じてつながりづくりをどんどんやっていく。

当事者の本当のことは当事者同士でしかわからないので、家族の会だけではなくて、認知症の本人同士の集まりの場をどんどんつくっていく。そういういろいろな取り組みをこの3年くらい特に強力にやっているのですが、そんなに実は難しいことではなくて、本人・家族が何を必要としているかという、本人・家族の声を根拠に、あるものをつながりながらこういう動きをしていったことで、今、トップランナーと言われるような実践が生まれてきているという点です。

これは、サポーター講座が今、広がっていますが、本当に何が必要か、知識だけで認知症とはだけを学ばずに、この地域で暮らしている本人・家族の切実な苦しみを聞いてもらおう。苦しみだけではなくて、こんなことをしたい、町でこんなふうに暮らしたいからちょっとこんな支援をしてほしい。医療や介護はこんなことを配慮してほしい。本人・家族に語ってもらおう。もう隠している時代ではない。認知症になったことを隠す時代ではなくて、こうやって自分たちが認知症になったことをみんなの前で語ることで支援が広がるなどと、これは認知症の人を富士宮市ではキャラバンメイトとして委嘱して、本人自身がサポーターの方たちに伝える、そんな活動をしています。

このように、本人・家族からとにかく学び続けながらということで、本人としては医療や介護も必要なのだけれども、生きがいがないと生きていけない。生きがいがないと落ち込んだり、自分でできることもなくなっていってしまう。特に社会貢献の仕事がしたい。仲間が欲しいとか、御近所とのつき合いを続けたい。御家族からもいろいろな声を聞きながら、これを根拠に取り組みを進めているという状況です。

ちょっとこれは時間がないので、参考までですけれども、一人のケースを徹底的に地域ケア会議とか、一人のケースを丁寧になると、他職種と一緒にやらなければダメだというさまざまな場面が見えてきます。地域ケア会議などでも一例から丁寧に、いろんな方たちと一緒にあって検討しよう。

数を急がないでいいから、一人の人を丁寧に、一人の人から地域ネットワークを広げていこうという取り組みです。

認知症の人が一人いる。地元でこの人をどう支えられるか。これは地区社協の人たちと本当に力を合わせて、この地域にいる一人の人が暮らしやすくなるように、お医者さんや介護職もこの中に一緒にまじって、専門職、住民と一緒に、どうやったらこの人が暮らせるかを話し合っていこうという、こういう中で出前の医療や介護の相談も始まっていっています。

もう一個、最後にですけれども、本人・家族の本音を得るために、宮城県の大崎市は心の声アンケートをケアマネジャーさんの協力を得ながら、実際、どんなことが今、必要なのかという、ケアマネさんと力を合わせて声をまとめながら、介護の人たちも一緒になって、地域づくりに取り組んでいこうという流れが進められています。

本当に急いでしまって申しわけありませけれども、ケアマネさんの調査を通じて、最前線で認知症の人と家族を支える対応力、本人・家族の声をしっかり聴きながら支援する力を持った職員を育てていく必要があるということで、大崎氏、もう始まって3年目、4年目ですけれども、毎年市として人材養成をしようということで、介護職、医療職などを集めて、チームとして何ができるかという人材養成を進めて、非常にこれが活動を進めていくためには、力のある専門職を育てないといけないということで、この人材養成を通じて。

次のスライドにありますように、包括単位で推進チームができてきています。この研修を受講した人たちが中心になって、この包括の単位は自分たちがしっかりと守っていく。専門職が住民の人たちをしっかりとバックアップしながら、この地域でそれぞれの地域ごとの課題を捉えて取り組んでいくぞ、この地域で何が必要かも一緒に考えたり、ここの地域ごとのカフェをつくろう、この地域の中での早目の相談の機会をつくろう、それぞれの地域の中で居場所のカフェや早目の相談コーナーや、困難事例のときのアウトリーチの、困った人のところ、医療や介護に届かない人のところには自分たちがチームでつくって、御自宅に声をかけに行ったり、それぞれの地元チームをつくりながら、当事者に行き届く取り組みを、着々と成果を上げているような例です。

この全体を束ねるものとして、行政と初期支援チーム、本当の意味で困難ケースで専門職の本当に高度な専門性を持った人だからこそできることを中心において、もっと現場側で多様な人たちが力を合わせれば支援できる人たちは地元で支えて、本当に困った人たちを市のほうで設置しているチームでバックアップしていこうと、あくまでも当事者に近いところにチームをつくろうという取り組みです。

非常に、これは皆さんが、市の人も包括も関係者も言っているのですけれども、楽になったと。地元で一緒に取り組める仲間が増えたら本当に楽になってきているという声です。

今日、長々お伝えしましたけれども、今、全国で取り組みが進んでいる自治体の共通な点、先ほどもお伝えした本人視点の重視ということで、本人視点がしっかりと重視されると、発症してから

本人が余り状態を崩さないで、ぎりぎりまで本人が力を出しながら亡くなっていくことができる。本人に合った医療や介護や専門職だけではなくて、非常にたくさんの地域の人たちが生活仲間として本人を専門職と地域の人と一緒に支えていく。従来は、正面のスライドの赤い線、発症するとどんどん悪くならざるを得なかった。病気のせいになってきたけれども、病気のせいというよりは、地域の理解や支援とかつながら、本人の視点に立った支援が足りないために、障害が増幅された人が余りにも多かった。このために医療や介護費が高騰してしまっている。

これからの時代、それぞれがばらばらに医療や介護、地域の支援をするのではなくて、専門職と地域の人が一体になって、一人でも多くいい経過、発症してからいい経過をたどれるように総力を挙げようという、市のスローガンとして一人でも多くの方がよりよく暮らしていけるように、まさに足立区も掲げている、認知症になっても本当にいい状態で住み続けられるようになる。

事業をやることは手段であって、最終的なゴールは一人一人がいい経過をたどれること。そんな点を見失わないでということが今、言われている点です。

今日のまとめですけれども、いろんな情報をお伝えすると、やらなければと焦りがちになるかと思いますが、どうか焦らずに、足立区として目指す方向、どういう方向を目指してやるのか、冒頭で加賀市がお伝えしたように、いろんな人たちが方向合わせをして、せっかくいろんな人たちがばらばらに、ベクトルが違う方向に動いてしまったらもったいないですので、足立区はこういう方向でいこうということをしっかりと語り合って、特に部会で、こういう方向でいこうというのを決めたら、しっかりと掲げて、行政や中枢の方たちがぶれないで、誰に対しても足立区はこれをやっていこうというのを強力に伝えていくような、実は単純なようで、非常に多くの人たちの旗頭になることが今、必要ではないかと思えます。

一部で進めない。既にいい動きをしている人たちが足立区にもいっぱいおられると思いますので、これまでのいい動きの人たちを大事にして、取り組みや意見を束ねていこう。あと、動き出すきっかけを待っている人が地域の中にきつといらっしやるとおもうので、呼びかけながら力を一緒に出してくれる人を吸収ながら、裾野を広げていくということ。あと、ぜひ量を焦らずに、例えば包括に来ている例ですとか、民生委員さんに届いている例とか、一例からでもいいので、先ほどのような軒下マップをつくって、一人を支える、一人を通じて医療や介護、地域の人たちが本当に力を合わせて支えるという実例を出さないことにはどんな動きも空回りしがちですので、実戦を積み上げていくという点が、重要な点として全国から今、提唱されているところですよ。

すごく大急ぎでしたけれども、情報提供をさせていただきました。済みません、大急ぎのお話をお聞きいただきまして、どうもありがとうございました。

ここから、その次の議事に入っていきたいと思えます。（拍手）

どうもありがとうございました。

それでは、この後はこちらで。

依田高齢サービス課長 モニターの映像がございますね。

永田部会長 時間もちょっと延びてしまったので。

依田高齢サービス課長 大丈夫ですよ。せっかくの機会ですので。

永田部会長 済みません、ちょっとこちらが時間をとって。最後に一つ、皆さん、九州福岡の大牟田というのを聞きになったことがあると思います。大牟田市が取り組んでいる、地域の人たちと医療・介護の職員と一緒に支えている例を、4分ぐらいですが、見ていただければと思います。

(ビデオ上映)

永田部会長 これは80代のひとり暮らしの認知症中度の方の様子です。ひとり暮らしです。行方不明の危険も非常に高い方で、御近所からも自宅は無理で施設に入れるという声も上がっていたケースです。

本人が暮らす流れに沿って、マップをつくっている。声をかけてくれる人がいる。本人からすると、誰かが声をかけてくれるととてもうれしい。

本人がどこに行きたいのか。80代のおばあちゃんだけれども、実はパンが大好きで、パン屋さんに行きたい。パン屋さんのお姉さんに説明したら、わかった、では、この人は私たちが見守ると、若いパン屋のお姉ちゃんたちが本当に本人に見守り隊になってくれています。

地域の昔からの商店の店長さん、本当に顔なじみを生かして、冷たい目で見ないで、ちょっと本人さんを支えてという中継ぎをしたら、よし、任せておけと町の人たちを意識づけてくれています。

店員さんの一人です。本人が総菜を買い続けられるように。

銀行でもいっぱいトラブルがあった方でした。このひとりの人をきっかけに行員がバイトの人も含めて認知症サポーター講座を受けて、優しく対応するんだ、優しく対応すれば本人もまだまだ銀行に来られるぞと。

24時間営業しているコンビニは物すごく大きな見守り拠点です。若い店長さんは本人のために椅子を置いてくれて、今、コンビニはとても大事な認知症の人たちの居場所になってきています。

かなりの距離を歩かれます。どこに歩くか、本人に沿っていくと、ディスカウントストア。この方はお金を持ってこなかったり、スーパーでもいっぱいトラブルが起こっているのがわかりました。スーパーの従業員が全員サポーター講座を受けてくれて、この人だけではない、もっといろんな人もトラブルっている。今までの問題のお客さんではなく、優しく見守って、自分たちが包括につながるいいんだという、そんなスーパーの人たちが重要な早期発見とつなぎ手になってくれています。

本当に町の一人一人が全て実はとても大事な本人の支え手になっていく。特別ヘビーなことは何もしなくていい。ふだんの仕事の中でちょっと意識をすると、ふだんの仕事をしながらも、重要な見守り手や支え手になってくれる。そして、民生委員の方や公民館の方、福祉委員の方たちがしっかりと地域の人たちのかなめ役になってくださる。こうしたことを病院の職員やケアマネとか、地域の人たちが安心して認知症の人とかかかっていけるように、医療機関や介護の専門職がしっかり後ろから支えているという取り組みです。

一人一人こんなマップをつくって、一人を誰が支えていけるなどという、一人を中心にしたネットワークを積み上げることで、本当に生きたネットワークが広がっているという例をお話させていただきました。

ごらんいただきまして、どうもありがとうございました。

(ビデオ終了)

依田高齢サービス課長 永田先生、貴重なお話をありがとうございました。皆様にいま一度拍手

をいただけると（拍手）

本当にありがとうございました。

それでは、議事に入らせていただきます。ここから先の議事につきましては、永田部会長、お願いいたします。

永田部会長 それでは、早速議事に入らせていただきます。

報告・検討事項について、高齢サービス課長から御説明をお願いいたします。

依田高齢サービス課長 それでは、私のほうから資料2の内容について少し御説明をさせていただきたいと思います。

お手元の資料2をごらんください。まずは「高齢者分野・認知症に関する基礎的な情報」といたしまして、足立区のほうでことしの9月に人口推計の新しいものを出しました。その説明でございます。

一番上にありますのが、67万4,111人というのがことしの推計全人口でございます。その下にあります16万2,806人というのが65歳以上の人口の推計ということになっておりまして、10年後になりますと、全人口はほぼ横ばいですが、65歳以上の方が大体1万人ぐらい増えていくということで、推移をしていきまして、全体の人口をずっと72年まで見ていただきますと、全体人口は減っていくけれども、65歳以上は20万人を超えていくということになっております。

その高齢化率について置きかえたものがその下の表でございます。

1枚おめくりいただきまして、ページ数で3となっているものをごらんいただければと思います。こちらが後期高齢者の人口でございます。75歳以上になっております。棒グラフのほうは推計値で、平成27年は7万4,729人、これがずっと増えてきまして、最終的に平成67年ぐらいになると12万人を超えていくというような推計になっております。10年後ですと10万人を超えていくという推計になっております。

また、その下にありますのが、85歳以上の推計値になっております。85歳以上ですと、今、1万7,000人ちょっとの方ですが、4万人にだんだん近づいていってということで、数字が推計されております。

また、もう一枚おめくりいただきまして、5ページ、高齢者のみ世帯ということでお示しをさせていただいております。棒グラフのほうが高齢者のみ世帯5万3,114世帯、このうち単身世帯が3万2,007ということで、こちらについては推計値ではなく、これまでの実績の数字で、平成18年は5万3,000世帯だったものが、今、7万5,000世帯になってきている。単身世帯ですと、3万2,000が4万7,000まで増えてきましたというのがこれまでの推移でございます。

また、その下にお示しをしているのは、認知症高齢者数の推計でございます。いろいろ御意見はあると思っておりますけれども、65歳以上の方々が16万3,000ということに対して、認知症高齢者が約2万2,600、また、MCI、軽度認知障害の方が約2万1,300ということで、大体4万4,000ぐらいではないかということで、お示しをしているところでございます。

もう一枚お配りをしていると思います。前回の地域包括ケアシステム推進会議の全体会の中でリクエストいただきました資料のうち、間に合ったものだけお示しをさせていただいております。

まず、年齢層の推移でございますが、14歳までと15歳から64歳まで、65歳以上、75歳以上、85歳以上ということで、1番のところでお示しをしております。

また、各ブロック別のということで、13ブロック、介護保険の圏域ではなく、足立区で言っています13ブロック単位でお示しをしているのがその下の表でございます。千住地域と綾瀬地域が7万を超えているということになっております。

また、裏面をごらんいただきまして、65歳、75歳、85歳以上の予測の値でございます。それぞれ数字が先ほどと同じ数字ですけれども、一覧表にさせていただいております。

また、高齢者のみ世帯の水位についても、同様にお示しをさせていただいております。

また、単身世帯の年齢につきましては、今、お示しをしているとおりということになっております。

資料2の関係につきましては、簡単ではございますけれども、後でまたお目通しをいただければと思っております。

続きまして、資料3の、足立区での現在の認知症に関連する取り組み等々について、少しお示しをさせていただきました。

申しわけありません、今回、急ぎでつくったものですから、この先々、お示しするときにまた違う形になっていくと思っておりますけれども、まず、資料3、A3横のものですけれども、地域で支える地域資源の整備ということで、左から順番に御説明させていただきますと、サポーター養成講座ですけれども、今年の9月末現在で延べ1万6,971人の方にお受けいただいております。今年度につきましては3,000名程度ということで予定をしております、来年以降につきましても、5,000名程度と思っております。今年初めて、認知症サポーター養成講座のフォロー講座というものを開催させていただいております。このフォロー講座についても少しやっていかなければいけないかなと思っております。

また、認知症カフェにつきましては、平成27年度、各地域包括支援センター25カ所ありますけれども、それぞれのエリア内に1カ所ずつ開設をしてほしいということで、今のところ動いていただいております。また、やすらぎ支援員という登録制の制度がありまして、御希望される認知症の方で、条件が合えば派遣をさせていただいております。

また、今日、お配りはしておりませんが、オレンジマップということで、認知症の地域支援マップを今年、各地域包括支援センターごとにつくっていただいております。また、通所の施設とか、特別養護老人ホーム等につきましては、記載されているとおりですので、御覧いただければと思っております。

また、一人一人の区民の方をサポートするというので、下の段に書かせていただいておりますけれども、介護予防のチェックリストにつきましては、今年65歳以上の要介護の認定を受けていない方、大体13万人とちょっとですけれども、そうした方々に新しく認知症のチェック項目を追加してお配りをしています。厚労省が決めているものにプラスアルファをしております。

今年につきましては、認知症が疑われる方を中心として、未回答の方も含めまして、訪問調査をしていただく予定になっております。また、来年以降につきましては、3歳刻みということで、65歳、68歳、71歳、74歳という3歳刻みでチェックリストをお送りして、早期発見、早期治療ということで、必要のある方については個々に訪問をさせていただきたいと思っております。

もの忘れ相談事業につきましては、各地域包括支援センターで足立区医師会の先生方に御協力をいただきまして、年に4回ずつ開催をさせていただいております。

また、東京都の認知症疾患医療センター大内病院さんですけれども、そちらによるアウトリーチを実施していただいております。また、今年度から見守りキーホルダーですとか、あんしんプリントという事業も区のほうで開始をさせていただいております。

こういった体制を支えるために、地域包括支援センターの強化ということで、少し対策をとらせていただいておりますので、一番下にお示しをしているところでございます。

駆け足ですけれども、私からは以上でございます。

永田部会長 ありがとうございます。

今、統計と全体イメージを御説明いただきましたけれども、いかがでしょうか。皆さんのほうが今の2点御説明いただいたことについて、御質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。

お願いいたします。

井元委員 資料3ですが、これは大体症状別というのですか、全体の連携パスみたいなものあらあらのものを書いているのでしょうかけれども、病気別、軽度とか、初期とか、重症とか、その医療フローとか、介護、あるいは地域サービスのフロー、そういうものを一個一個やっていくと、その病気別の連携パスが一つずつ完成するのではないかと。

一番重要なのは、家族とか本人が相談をしよう、あるいは受診をしようという意思のある方はそれでいいのですけれども、町田市もそれを考慮されておりましたけれども、意思のない方、あるいは完全に孤立してしまっているかたをどうするかというあたりが、各病気に必要だと思うのです。あるいは、気づきというところでは、病気別も全部一緒に議論がもしれません。

足立区では孤立ゼロプロジェクトという、地域で孤立している方をなくしていこうというプロジェクトが町会自治会と民生委員さんを中心に、まずは実態調査をやって、それで必要な方には個別の訪問をするというベースの事業がございまして、それを活用すると、相当地域で知らないうちに孤立していて、サービスが必要だ、あるいは医療が必要だという方があぶり出されてくるのではないかと考えているのですが、その気づきのシステムを議論すると、非常に漏れなく一つのフローができ上がってくるのかなと。

多分、この気づきの部分というのが足立区では非常に先進的に、もしかすると展開できる分野かなと。

それから、医療の部分も、非常に精神医療の医療機関もたくさんあるところでありまして、医療のほうも、かなりリハビリも含めて特徴的な対策がとれるのではないかと。

そういう足立版の、非常に先進的なシステムを今後、議論できたら非常に幸せだなと思っております。ちょっと私から感想を述べさせていただきました。

永田部会長 ありがとうございます。

御質問というよりは、次にお話ししたかった本当に大事な御提案も含めてのお話をありがとうございました。

先ほどの資料2点については、御質問は今の段階では。

茂出木委員、お願いいたします。

茂出木委員 民生委員の茂出木と申します。

認知症のサポーター養成講座なのですが、ここで1万6,971名という方が受講されたということなのですが、この受講者の御年齢層とか年齢別とか、例えば銀行とか郵便局さんとか企業とか、そう



いう方なども含まれているのでしょうか。それから、PTAさんでも講座をやりました、こういうのをやりましたとか、何かその辺の情報がもし、ありましたら、お願いいたします。

依田高齢サービス課長 ありがとうございます。

大変申しわけありません。年齢別についてはちょっと詳細は把握しておりませんが、銀行さんですとか、会社とか、そういう団体でやっていただいているケースも確かにございます。

また、今年は警視庁さんが警視庁全部やるということで、4警察署も手を挙げていただいております。まだ全部終わっていませんが、かなりの部分やるということで、やっております。

茂出木委員 ありがとうございます。

永田部会長 ありがとうございます。

あと、御質問いかがでしょうか。

よろしくお願いいたします。

久松委員 足立区医師会の久松ですけれども、この資料3の中でちょっと抜けているのかなと思ったのは、老人保健施設が入っていないのですけれども、これは入っていない理由がよくわからないのが一つ。

それから、医師会のほうでは、現在、認知症対応力向上研修を受けている先生方が大体153名いるのです。今度は大内病院さんのほうが主体となって研修事業をされるのですね。それから、153名の中からサポート医が現在19名いますので、医療体制としてはそういう形でやっている。現在、地域包括支援センター25カ所ありますけれども、その25カ所に対してサポート医が各1つないし2つ担当するという地域割りみたいなことが今回、今年になってでき上がったので、そういうことも参考までにお聞きしていただければと思います。

依田高齢サービス課長 ありがとうございます。

老健さんが載っていないのは別に他意があるわけではなくて、正直、忘れていたというか、うっかりしておりました。申しわけありません。

医師会さんですとか、いろんな方々についてこの後、どんどん変えていかなければいけないのだと思っていますので、順次そういった中で取り込ませていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

永田部会長 大事な点、ありがとうございます。

今、お聞きすると、サポート医が19名というのは都内でも物すごく水準が高いという貴重な、サポート医の先生が包括単位にちゃんと担当いただけるというのは、非常に包括と医療と大事なフォーメーションができつつあるのかなとお聞きいたしました。

一旦質問はこのあたりにさせていただいて、この後、次の議題に進む中で、委員の方お一人お一人にぜひ御発言いただきたいと思いますので、もし、御質問があれば、その中でもお話しをいただければと思います。

次の検討課題「認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて」、それぞれのお立場で御意見や御提案、あるいはお気づきのことをぜひ、今日は本当にざっくばらんに御自身のお立場を生かして御発言いただければと思います。

どなたからでも結構ですけれども、いかがでしょうか。先ほど私も情報提供させていただいたのですが、そういうものもたたき台にしながら、足立区はこういうことがやさしい地域づくりに向けてこれから必要ではないかとか、先ほどお話があったように、既に足立区はこういう面も、例えば

先ほどの支援プロジェクトがあるとか、サポート医の先生がおられるとか、こういう点をもっと大事に生かしていったらいいのではないかと、既に今の検討課題に先駆けてお話しいただいていますけれども、いかがでしょうか。

足立委員、よろしくお願ひいたします。

足立委員 私、綾瀬の町会自治会の会長を仰せつかっているのですが、ちょうど今から2カ月ほど前、私が提案しまして、自治会の役員で認知症サポーターを、足立区は今、5万人を目標にしていると伺ってまして、受けました。役員は35人しかいないのですけれども、このオレンジリング、ちゃんといただきまして、認知症になられた皆さんを何とか優しくサポートしようと、こういうことを思っています。

ちょうど3年ほど前ですかね。先ほどから話が出ていました孤立ゼロプロジェクト、これも私、率先して手を挙げまして、自分で町会でやりまして、いないと思っていた70歳以上の単身世帯が126世帯あって、75歳以上の二人住まいが100世帯ぐらいあったのですね。それを個々に五、六人でみんなまで訪問しまして、どうなっているか、1日10分ぐらい近所の方とお話ししますかとか、体調はどうか、何かいざというときにはどこかへ御兄弟や御親戚に連絡する方法がありますかというのを聞き取りまして、本当に孤立という方が70歳以上ではいなかったですね。75歳以上でひとり住まいの方もいました。その方がちょっと危ないというので、包括センターに報告したのですけれども、そのように地域で見守っていくのが私どもの役目だと思っております。

という私も、今日誕生日なのですね。77歳の喜寿になりました。もう私もそのうち介護されるほうで、その節はよろしくお願ひします。

以上です。

永田部会長 ありがとうございます。トップを切って、とてもいいお話をさせていただいて、本当にサポーター講座をさせられるというよりも、それぞれの立場でこういうところでやるといいのではないかと、今の自治会とか、商店とか、やはり待っているというよりも、サポーター口座を自分たちがやりたいという人をどんどん増やしていくことの大事さとか。

足立委員 商店街もやっているのですよ。

永田部会長 商店街でもやり始めたとか、多分、足立委員のそういう商店街の例を、ほかの区内のまだ余り動きがないところにも、それこそ区内のいい動きの例などを知らせると、ほかでもきっかけがあればやりたいというところもきっとあるのではないかと。

足立委員 私も足立区全体の理事長をやっています、58商店街あります。その皆さんにも何とかこれを広めようと思ってお話ししているのですが、なかなかどうも私のいうことが通らなくて、今、皆さんが躊躇しているような。

永田部会長 本当にどこでもいい動きがあるところもあるのだけれども、逆にせっきくの動きがなかなか周りに波及していかないのを、むしろこういう部会とか、市からの広報とか、いろいろなものを使って、不可能ではないということを伝えていけるといいかなと思ってお聞きしていました。

足立委員 ありがとうございます。

永田部会長 どなたか大事な限られた時間ですので、どうぞ積極的にこんな点はどうかというのを願ひいたします。

茂出木委員 民生委員の茂出木です。

今のサポーター養成講座の続きなので、述べさせていただきます。

私もサポーター養成講座を実際に2回ほど受けまして、そのときはかなり受講者もいらして、オレンジリングをいただいて、ただ、その後、そのままになってしまっているような気がするのです。

せっかくそういう講座を受けていただいた後に、今、認知症カフェの開設というのが今年度、包括センターのほうで準備を進めているようなので、何かサポーター養成講座を受けた方がその後、カフェのところで何か地域のボランティアとして支えるネットワークの一員となってもらえるような形に持っていけないかと思いましたが、ちょっと発言させていただきました。

永田部会長 とても大事な点で、区のほうも多分、今、数だけを増やすのではなくて、受講した人がどう本当にこの支援のネットワークにつながるかをいろいろ考えておられるかと思えますけれども、今、これから各包括で立ち上げていくのが期待されているカフェとつなげられないかという提案もあったかと思えます。

事業者とか、何か今のことを踏まえて御意見とか、皆さん、どなたでも、先生でも御意見いかがでしょうか。

久松委員 医師会の久松ですけれども、先ほど話しましたサポート医と地域包括の連携というのは昨年ぐらいから練ってきて、やっと今年になって地域割りができてきた。

やはり一番最前線に立つのは地域包括支援センターなのかなと、そこにいろいろな情報が集約されますので、そこになるべく医師会としては協力していきたいなと。

そこで、医療と介護と福祉の連携というものを、地域包括ケアシステムになると思いますが、やっつけていければと思っています。

前の全体会の中でもお話をしたのですが、やはり足立区の人口全体を見てみますと、高齢者の単身世帯の方をどうやって支えていくのか。そういう方々が医療にかかわってくださればいけれども、もともとの社会資源が非常に乏しい方々にどうそこのかかわりをつくっていくのかなと、これはとても医療だけではできることではないし、そこはアンテナを上げてどうやって拾っていくのかというのが大事なかなと。そういう方々が結局初期に医療機関にかかるわけではなくて、地域の方々が、これは大変だと言って医療機関に連れてくると、もうはっきりと認知症が進んでしまった、中等度の段階ぐらいになってしまっているのです。本来はもっと早目の段階で、先生が書かれた図のようなところで、早期の段階で言えばいろいろな資源がそこに投入できるのではないかと思いますけれども、それをつくっていく必要があるのかなと思っています。

永田部会長 ありがとうございます。

地域割りができたというのは、本当にそこをどうお医者さん方と包括の連携の部分を生かしながら基盤にして広げていけるか、すごく大きな段階にまた進んでこられているのだと思いますけれども、単身者のことをアンテナを張ってという中で、医療機関と民生の方とか、誰が本当に気づける最前線で必要としている人に近いところにいるのかという、地元で誰が気づき得るのかというところを掘り起こしながら、アンテナを具体的にしていけるといいかなと思ってお聞きしていました。ありがとうございました。

いかがでしょうか。マイクの流れで、小川委員、いかがでしょうか。

小川委員 訪問介護部会の小川でございます。

先ほどの大牟田の映像をほのぼのと拝見させていただいておりました。

ここのシステムを構築することを議論する上で、今までいろいろ施策をやられていたと思いますので、先ほどの大牟田の成功事例なども含め、成功事例を知ること大事だと思うのですが、いろいろやってきたからいろいろな失敗もあったと思うので、こういうことをやったけれども余りうまくいかなかったということも知っておくことが大事なと。成功事例をそのまま足立区に持ってきたからといって、必ずはまるわけでもないし、よそではだめだったけれども、持ってきたらうまくいったということもあると思いますので、成功事例、失敗事例、もろもろそのあたり不案内なものですから、少し知っておくことが私自身は大事なということが一点。

それから、私はホームヘルパーの事業をやっている事業者の代表でお邪魔をさせていただいております。ホームヘルパー、通所介護保険でホームヘルパーが派遣される、いろいろな段取りをとる職種で、サービス提供責任者という者がいるのですけれども、サービス提供責任者に関しては、定期的に研修をやっている中で、認知症についての研修なども行っておりますが、全体的に実際にサービスに入っているホームヘルパーまでなかなか認知症の知識がどの程度あるかということは全く未知数でありますので、資料3の左上の認知症サポーターの養成講座などを、研修を推進しながらサービス提供責任者を初め、各家庭に派遣されるホームヘルパーについても認知症について少し周知を、知識をつけてもらうという作業が必要であるし、とりあえず最初の段階でできることなのかなとお話を伺っておりました。

以上です。

永田部会長 ありがとうございます。

訪問介護ヘルパーの方たちは前線で常に認知症に接していらっしゃる方もいれば、まだ認知症ではない方を支援されていて、早目の気づきとか、あるいはよくあるのは消費者被害とか、いろいろなものに気づいて包括とか人につなぐみたいなことも最前線としてできるすごく貴重なお立場だと思うので、ぜひ最前線の方の力をどうつけていただくか。また、事業団体が一緒になって進めていけたらすごく短期間にも力が上がったり、やりがいももっと出てこられる方もきっとおられるのではないかと思ってお聞きしました。ありがとうございます。

いかがでしょうか。この流れで、よかったです。

浅野委員 訪問看護部会の部会長をしております浅野と申します。

先ほど久松先生のほうからお話があったように、予防とか悪化を防ぐというところが、私が考える中ではこれからは重要なと思うのです。やはり出られるとか、先ほどの映像にもあったように、徘徊できて、寄るところがあって、優しく見守れるというところは、表に出るところではフォローができるのですけれども、今まで失敗例を考えると、独居とか、ひとり暮らしでとか、引きこもるところで、個人情報保護法という制度が邪魔ということではないのですけれども、自治会に関しても、自治会で声をかけようとか、私たちが訪問に行くと、隣の人が全然出てこないのだけれどもと言われたときに、声をかけていいですかというのは、自治会長さんに聞かないとわからないとか、心配している近所の方は要るのだけれども、サービス事業者が勝手に契約も結んでいないのに声をかけたりというのを大分禁止というか、許可が出なかったときもあって、孤独死とか、そういうことで、問題になりながらも、弊害になっていた部分があったのですけれども、やはり今回、医師会も含めて、包括も含めて、そういう見守り訪問というのですか、ちょっと寄って見たのですけれどもというのができる、先ほども足立委員からあったように、小さい単位、その団地の自

治会とか、まず小さい単位から情報がもらえるということと、外に出ないで引きこもる、軽度な状況ちょっと出るに連れなくなってきたという人たちの掘り起こしとか、発見というのができればと。それから始めないと、その人たちが放置されると悪化していくので、一生懸命優しく見守っても増えていってしまったらという思いでいます。

以上です。

永田部会長 ありがとうございます。

順番にお願いいたします。

武田委員 通所部会の部会長をさせていただきます武田と申します。

今日のこの一連の流れのお話をずっと聞きながら、若干腹に落ちていないとか、私の頭の中として、今、総論はわかるのだけでも、各論として具体的にどうやってというところが何かすっきりしておりませんで、確かにこういった認知症、その他含め、認知症というもの、あるいは認知症の方々に対する全体的な認知度を高めていくとか、理解を深めていくことはもちろん必要だと思いますし、そうであるべきだと思うのですが、私も実際にデイサービスを運営させていただいているのですけれども、サービスにお越しくださっている方々を見ていると、認知症という診断があって、その情報をいただいている、でも、一緒に過ごさせていただいているのと、そんなに言っても普通にコミュニケーションもとれるし、いつもどおりだねという方が、昨日は違ったのに、今日、突然昨日までと違う姿を見せられるということがあります。

具体例を言うとおわかりかもしれないのですけれども、具体的に言うと、先日あったのは、突然ごみ箱のふたをあけて何をやるのかなと思ったら、用を足そうとされたりとか、周りから見ていると、あれ、あの方はどうしてしまったのかということが起きたり、もう一つは、夕方にうちの会社に警察から電話がかかってきて、私が出たのですけれども、警察ですけれどもと言われると、私はちょっと内心どきどきとして、俺、何かやったかなと思いながら、お話を聞いていると、うちに来られている方がちょっと徘徊をされていて、保護をされていると。何でうちに電話がかかってきたのかといたら、おたくの事業所の名前を繰り返しお話しされているのでというので電話がかかってきたのですけれども、御家族とも連絡がとれなかったため、何となく私はそのままお迎えに行ったら、テレビドラマで見るとような取調室みたいなところにそのおばあちゃんがびくびくしているような感じで座っていらしゃったんですね。

ほかにもその取調室みたいなお部屋があって、トータル3名のおばあちゃんが座っていたのですが、入っていくと、3名とも私の顔を見て、あらというのです。でも、私は3分の2は存じ上げないのです。3人とも、あらと言われると、今度は警察の方の目がちょっと、こいつは大丈夫かなと、私のほうに来るわけでした。

こういった状態が現実には起きていながら、確かに認知症の方々に対しての理解を深めていったり、認知症というのはどういう御病気なんだということも知っていくことはもちろん大事なのですが、では、今、申し上げたような各論とかをどうやって支えていけばいいのだろうかというのはなかなか難しい。先ほど申し上げた、突然、今、このふたをあけて用を足されようとしたか、うちの職員ももちろんいろんな資格を取らせていただいたり、認知症について勉強しているつもりなのですが、やはりそういうことが突然起きると、一瞬手がとまってしまふ。何が起きたんだということで、一瞬間があいてしまったりとか、それが御家族の方であればもっとびっくりされる

でしょうし、久しぶりに会う肉親の方だったらもっとびっくりされるでしょうし、あるいは地域の方であっても、あの人が変わったねとはわかると思うのですけれども、では、自分がどういう支えをしていこうかと考えていくと、なかなか難しいのではないかとこのところで、ちょっと、各論の部分で何かすっきりできることを考えていければいいかと、ざっくりした感想で申しわけないのですけれども、そんな感じでございました。

永田部会長 本当に最前線でみんなが戸惑ったりすることで、具体をどう積み上げていくのか。今日は時間がなかったのですけれども、先ほどの大崎市とか、今、まさにそういう例を一例一列みんなでも検討して、一人では解決力に限界があるのを積み上げているみたいな例もありますので、またそういうところも、失敗例も含めてそういう情報を積み上げながら、足立区でも生かしていただければと思います。

急がせてしまって済みません。いかがでしょうか。

伊藤委員 千住桜花苑の施設長をやっております、伊藤です。施設自体は特別養護老人ホームということで、認知症状の方でもどちらかという症状の重い方というのでしょうか、さまざまな症状の方が主に御利用になる、ついの住みかというのでしょうか。そういう機能の施設です。

重い方がたくさん入る施設ではありますけれども、あくまでも人為的に用意された環境での生活ということでございますので、やはりまだまだ地域の環境が整っていれば、まだ在宅生活ができたのではないだろうかという高齢者の方も少なからずいらっしゃるのかなという感じは非常に受けております。

各論というお話もちょっと出ておりましたし、さまざまな先生のほうからも地域包括支援センターの機能というお話が出ておりましたけれども、地域包括支援センターのさまざまな新しい事業を委託されて、現場の職員もかなり大変な思いをしながら日々現場に出ているという事実を知りながらではあるのですが、やはり介護は休みがないというところがありますので、何とか日曜日でも地域包括センターが機能してもらえると、本当に助かるなという場面が少なからずこれまで体験としてありましたので、まだまだ日曜日が機能していないという事実がありますので、在宅の介護を日々、されている方、認知症の御利用者の方御本人、地域の方の総合的な窓口としての機能という位置づけであれば、日曜日の機能というのは非常にこれから大事というのでしょうか、そういう位置づけになってくるといけないかと思っておりますので、ぜひサービスの項目が増える、これもありがたいことではあるのですけれども、同時に窓口の開設の日数、本当に理想を言えば最終的には365日きちんと連絡がとれる機能になってもらえると非常にありがたいと思っております。

以上です。

永田部会長 大事な点ありがとうございました。

いかがでしょうか。

縄田委員 東和にあります老健施設のホスピア東和の看護師長をやっております、縄田と申します。

私たちの施設は、通所のサービスもやっておりますし、入所の施設としては高齢者の自立支援というところを主として支援を行っています。総数172を持っているのですが、64床は認知症フロアということで、支援をさせていただいているのですが、入所される、認知症と言われる高齢者の方はやはり御自宅ではやはりいろいろなサービスを使ってこられると思うのですが、御家族様もかなり大

変だったろうなという印象も方も多々入所されています。やはり一日の時間でも様子が変わってしまいますし、先ほども話があったように、その日によって症状が変わってしまうということもあります。

私たちは、高齢者、認知症のある利用者さんに対しては、受け入れて、コミュニケーションを十分とってというようなかかわりを時間かけてすることで、実際に利用者さんも落ちついてくることがありますし、あとは、お薬などもきっとおうちのほうではなかなか正しく飲めていなかったのではないかという印象もありますので、そういった形で支援させていただけると、本当にたくさんいらっしゃるので、認知症があってもその人らしく笑顔で施設で過ごしてもらえということも、現実させていただいていますので、そういったかかわりが地域の中でもやっていけば、混乱する時期というのが短く済んでいくのではないかということを感じています。

こういった地域ケアシステムの中に、現在、こういった老健施設は地域となかなか深い結びつきがないので、今後、本当に具体的なことは私もまだ勉強不足なのですが、一緒にかかわっていききたいなと思います。

以前、個人的に認知症ケアについて都議会委員さんとお話したときに、足立区というのはすごく町内会のつながりが強い。そこが強みだねということを知ったことがありますし、私も足立区に15年くらい住んでいますので、本当に地域のお祭りとか、子供会とかというところがすごく、下町の雰囲気というのですが、そういうのがすごく特徴的だと思いますので、そういうところでネットワークにもなるのではないかと思います。

あとは、私たちの施設、宣伝ではないのですが、認知症ケアに対して学習療法というのを取り入れてやっております。今、足立区の事業所とか地域でも少しずつやっている事業所があるかと思うのですが、そういった支援を通じてネットワークも今、持っておりますし、ちょうど明日なのですが、ギャラクシティのほうでそういった認知症をテーマとした映画を一つ上映会をさせていただいて、その後、認知症サポーター講座も行いますので、ぜひ御興味がある方はお声をかけていただければと思います。

済みません。宣伝になってしまいました。

永田部会長 ありがとうございます。

西島先生、いかがでしょうか。

西島委員 大内病院の西島です。

前回、入院治療と外来通院の方の治療をしていましたが、今回、疾患医療センターとして新しくアウトリーチ事業を始めています。

アウトリーチ事業は本来的には早期発見、早期治療ということが課題だったのですが、自主的にはなかなか治療につながらない方が地域で生活している。そういう方を中心に支援を行っています。

アウトリーチにかかわった方が全て治療を受けられるというわけではなくて、むしろその方を取り巻く周囲の方々に、御本人の状況はこういうことですよということを確認していただくということが、アウトリーチの仕事の半分ぐらいになっていまして、そういうことを考えると、地域の方々の御理解を得るということがとても大切なのかなと感じています。

あともう一つは、高齢者で認知症になっていく、徐々に重くなっていく過程の中で、認知症の薬が幾つか出ていますが、なかなか、飲み続けることが難しいと言われているのですね。認知症の薬

は一度飲み始めればずっと飲み続けることになると思うのです。糖尿病の治療と同じです。ただ、1年間に半数の方がやはり通院をやめられますね。それだけ薬を飲むということは簡単なようなのですが、難しいということが今後、課題となってくるのかなと思っています。

以上です。

永田部会長 どうもありがとうございました。

薬のことの重要さも、半数やめられるという大事な、そこをどう継続するか。医療だけではなく、そういうところも地域等の見守りとか、支援とかも絡んでくることかもしれないですね。

内藤さん、お願いいたします。

内藤委員 シルバー人材センターの副会長を務めております内藤と申します。よろしくお願ひいたします。

私どもは、医療とか、介護とか、そういうことにかかわっているところではございませんので、皆さんとは違う視点から気づいたことをちょっと3点ほど申し上げたいなと思っております。

1つは、予防という点なのでございますが、シルバー人材センターは現在、3,700人の会員がおります。入会資格が60歳からなのです。だから、一番若い人でも60歳で、最高年齢は97歳という方がおるわけでございます。まさに高齢者の集まりなわけです。

今、どういうことを私は日ごろ感じているかと申しますと、同年輩のほかの方と比べて大変元気のあるということと、日々生き生きと生活をしている、常に何かに挑戦していると、そのように感じているわけです。それは、いろんな形でもって社会参加をしているという結果なのです。ですから、いかに社会参加をすることがいつまでも元気でいられるか。言いかえれば、認知症にもなりにくいし、あるいは介護も受けることを少し遅らせることができるのではないかと主観的にそのように思っているわけです。

一つの事例として申し上げますと、現在、会員の平均年齢は73歳を超えています。入会されてくる方の平均年齢は、ざっくりいうと大体68歳ぐらいです。入会されてくる方は先輩会員と面談をするわけですが、面談をする側の会員は大体73歳とか75歳を超えているとか様々で、かなり高齢の方もいますが、全然元気度が違うということです。そういったことから、社会参加していることは物すごく医学的にもいいのではないかと感じる感じがしばしばございますので、このようなことも、これからきちんと整理していきたいと考えているわけです。

それから、3,700人の会員が何らかの形で仕事に従事しているわけですが、やはり多いのが公園であるとか、商業施設とか、そういうところで働いているわけですね。これは言いかえると、高齢者の接点が物すごく多いところなのです。今、公園に行っても子供より高齢者が多いということですし、日中の商業施設は若い人よりは高齢者が多いということですから、毎日数千の人が高齢者と接しているということですね。明らかに様子がおかしいというような場面に遭遇することもあるわけですが、今まではそういったことは見送っていることが多かったのです。

きょうの永田部会長のお話をお聞きしまして、非常に頭がクリアになったことは、そういったときにやはり何らかの形で我々が声をかけたり、あるいは何か仕組みをつくって手助けをするということができたら、大変いいのではないかと今日、感じました。これが2点です。

3点目は、やはり先ほど部会長ともお話ししましたし、今の委員ほうからも大変貴重な提案をいただいたわけですが、実は、私ども、いくら元気とは言っても、やはり年々年齢を重ねていくわけ



ですから、明らかに認知症の気配が出てきたと思うことがあるのです。先ほどもお話がありましたように、今日は元気だったけれども、明日はちょっと違うとか、午前と午後とはちょっと様子が違うというようなことが出てきて、恐らくこれは認知の始まりではないかと思うのです。

そういった方も現在、仕事にはついているわけですが、できるだけそういう方を集めて、普通の会員がサポートしながら、例えば草むしりであるとか、そういう軽易な仕事をするを皆さんで見守りながらやっていくということになれば、これからも地域の中で、仮に認知症になっても、働く意欲があれば、そのような形でもって組織というか、仕組みの中で働いていただくということは、いろんな意味で貢献できるのではないかとこのことをちょっと今日、感じましたので、ぜひこの辺のことも、皆さんの御協力を得ながら、今後、進めていけたらと思っていますので、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

永田部会長 ありがとうございました。

いかがでしょうか。時間が押してきていますが。

橋本委員 私のほうからは、今、ちょうど内藤さんとお話ししていたことというのは、永田部会長の御紹介に上がっていたような富士宮の支援体制とかを見ていくと、足立の中でもシルバー人材センターと福祉の観点から連携した仕組みを構築できるのではないかと思った次第です。

今、幾つか、永田部会長からの御説明で、大変焦りというか、先進事例の話を知ると、追いつかなければという思いもするのですけれども、先生も途中でお話があったように、一步一步進んでいくというお話もありましたので、とりあえず庁内で少し関係各課とワークショップみたいな形で話してみるとか、あるいは、認知症サポーター養成講座なども、当事者の人に来てもらったほうが説得力もあるのかなとか、やれるところから少しずつ積み重ねていければと、今、考えている次第であります。

永田部会長 ありがとうございました。

いかがでしょうか。

井元委員 先ほど発言したので、一言だけ。

何か上から目線、健常者の目線で見るというのではなくて、いつか自分も当事者になるわけですから、お互いさまというのはやさしい地域づくり、そういう雰囲気のあるキーワードがあると、このやさしい地域づくりというシステムができるのではないかと思います。

孤立ゼロプロジェクトというのは「お互いさま」のまちづくりというのをキーワードにしているものですから、多分、同じようなシステムになっていくと思うのですけれども、そういうものをぜひ中に入れていただけるといいなと思いました。

以上です。

永田部会長 それでは、少しお時間が押してきているようなので、大体このあたりで、皆さん、発現されていない方は一声出してくださいませでしょうか。大丈夫でしょうか。私の時間配分が悪くて済みません。

今日だけでは決してなくて、ぜひ、今日お話を聞いているだけでも本当にまだまだそれぞれの立場で今までの関連とか、ふだんも皆さん、走りながら働いていらっしゃると思うのですけれども、今、ちょっと踏みとどまって、認知症の人との接点とか、今までやってきたことで生かせる点がな

いかとか、自分だけではなくて、自分と同じ立場の皆さんの背後にも相当多くの関係者がいらっしゃると思うので、そういう人たちにもこういう認知症の人と、これからどう一緒にやさしい町にしていけるかみたいなことを投げかけていただくと、もっともっと、今、既にやっていること、抱えている課題、これからこういうことができたらいいなというアイデアもいっぱい出てくるのではないかなと思って、今日、お聞きしていました。

今日、もう一個の発見は、それぞれの方の立場がつながると、きっともつながつたことで、今まで解決できなかったことを少し一歩進むこともしゃいあるのではないかと民生委員の方と事業者の方や、医療の先生方と、また、早期に発見する地域の方とか、介護でデイサービスとかで、本当に困られ足りすることも多いかと思いますが、その方が、帰ってからの様子はどうなのだろうとか、職員だけが奮闘せずに、地域での関係者とタイアップできないかとか、本当にそれぞれがつながって、一緒になりながらやさしい地域を具体的にどうやっていけるのか。ぜひ、今後は、今日の話を出しておしまいしないで、それぞれの立場での実情を踏まえつつも、問題のところだけで足踏みせずに、今の状況からもう一歩、できそうなことは何かという、ぜひそんなできること、できそうなことへの議論を展開していければいいと感じました。

今日、私が話させていただいたのは、余りプレッシャーとかにぜひ思わないでいただきたいのは、冒頭でお伝えしたように、結構お金の面でも人手も厳しいところばかりなのですけれども、何で動いたかという、会議室の会議だけでおしまいしないでというのがそれぞれ共通していて、一個でも、できそうだというのがわかったら、とにかく動いてみる。動いてみながら、動く中でつながりが具体になってきて、動くことで、失敗してもそれもまた学びになるみたいな、ぜひこうした部会ができたのをきっかけに、お互い、これを一緒にやれたらいいねとか、やれる人からやってみないかみたいな、ぜひ今回がそういうアクション型の取り組みになって、施策もやってみたことを踏まえながらつくられていくような、現場の人たち、最前線の人たちの取り組み等、声をもとにして施策がつくられていくような流れが強まっていったらいいかなと思って聞かせていただきました。

私は地元にはいない、不勉強な状況でここに来させていただいて、時間配分もまずくて申しわけなかったと思いますが、今日の貴重な御意見をぜひ大事に、これからにつなげていければと思います。一旦ここでこちらのほうからマイクをお渡ししたいと思います。

依田高齢サービス課長 永田先生、どうもありがとうございました。

事務局のほうから連絡事項を御説明させていただきます。

委員の皆様、長時間にわたり貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。本日いただきました御意見を参考に、引き続き認知症施策を考えていきたいと思っております。

次回の部会ですけれども、まだ日程を決めておりません。年内には難しいと思っておりますので、年明けに開催ができればいいと思っておりますが、日程が決まり次第、また御連絡をさせていただきますと思っております。

謝礼を支払いする委員の皆様で、書類がまだお手元にある方がいらっしゃいましたら、お帰りの際に事務局のほうにお渡しいただければと思っております。

本日は以上でございます。貴重な御意見をたくさんいただきまして、まことにありがとうございました。次回またよろしくお願いたします。どうもありがとうございました。